



はくろんゆうだくせき
「白雲幽抱石」書道
あきら
 西井 晟さん(川上町臘数)



「ひな人形」折り紙細工
 山縣 貞子さん(有漢町上有漢)

「女豹」カットアート
 ロバート井上さん(備中町平川)



「猪の頭」工芸
 松田 金五さん(成羽町坂本)



東
 晴夫さん(中井町西方)
「春の花」竹細工

作品の募集について

- 【文芸】短歌、俳句、川柳など
 【作品】絵画、工芸品、町の風景写真など
- 自作の未発表作品で、一人一作品とします。
 - ギャラリーの作品については、その写真をお送りください。
 (撮影が困難な場合は、ご連絡ください)
 - 住所・氏名・電話番号・作品の場合はタイトルを明記のうえ、お送りください。
- ※締め切り掲載号の前日の末日(必着)

- 【送り先】〒716-8501(住所不要)
 高梁市役所企画課公聴広報係
- ※応募多数の場合は、紙面に掲載できない場合もありますので、あらかじめご了承ください。
 ※提供いただいた写真等は返却できません。
- 問い合わせ 企画課公聴広報係 ☎0210
 Eメール: kikaku@city.takahashi.okayama.jp

市民へ

文芸たかはし

(敬称略)

短歌

戦場で友と共に戦った若かりし頃今は老後で平和を祈るのみ
銀嶺は山肌見せて里は春 白魔と化した豪雪は憎む
赤木 久代 (備中町西山)

春の雨あがりて明るき庭先に枇杷のつぼみの白く光れる
梅野 八郎 (松山)

あの人の笑顔と声の聞きたくてデイサービスは待ちに待ち行く
小野はる恵 (原田南町)

新世紀チルドレンさま手軽にチヨコレート渡す総理とれぬよ
亀石恵美子 (川上町仁賀)

残雪の冷たき山のおちこちに裸木の樹氷は懐として咲く
田中 弘子 (川上町領家)

やはらかき春の陽ざしの菜園に軍歌唄えば遠い青春甦る
戸田奈美子 (川上町地頭)

目覚めればビルの灯火ほのぼのとこは病床何故か安堵す
西井百合子 (横町)

悪しき事激流に乗せ自らを失わずして清きしぶきに
原田 由き (高倉町飯部)

回診の合間縫ふかに鶯の谷渡るらし初音聞ゆる
平 初音 (高倉町田井)

窓ごしにふれあい親子雪の中完走めざし力のかぎり
森崎 道子 (宇治町宇治)

俳句

のど鳴らす猫ひぎに置き日なたはこ
長原 茂子 (備中町西油野)

空の紺率いて下る流しびな
平松 幾代 (長寿園内)

田の神様おわす小径や草萌ゆる
藤森 末子 (有漢町有漢)

福寿草目さませば雪ふるえて
結城 成子 (宇治町宇治)

夕日映ゆ車窓ひろがる瀬戸の春
横内 瞳 (巨瀬町)

荒川の波のり越えて金メダル
横田 早苗 (備中町西山)

地名をよるし

十七 柿木町



「柿木町」は旧高梁市街にある町名で、北は伊賀谷川から南は荒神町・西間之町までと、東側は向町、西側には鍛冶町通りが平行して走っています。「柿木町」という町名は、近世松山城下の時代に下級武士が住む家中屋敷町の一つで、「柿木丁」と表記されていました。この城下町時代の町名が今も、そのまま受け継がれた町なのです。

「柿木丁」は江戸時代初期の元和三年(一六一七)になつて池田長幸により取り立てられた町で、松山城下のほぼ中央に位置し、町並みは「竪町型」の町通りとなっています。伊賀谷川を隔てた北側の中之町の町通りと「柿木町」の町通りは、見通しが利かないように谷川を境に町筋を鍵型にずらしています。

元禄(一六八八〜一七〇四)頃には、長さ一丁五五間、家数一九軒があつて、一〇〇石から三〇〇石の武士や七人扶持・五人扶持(一人扶持は一日五合の扶持米を給される)などの武士が住んでいました(「水谷史」=「御家内之記」)。その後、正徳元年(一七一一)から延享元年(一七四四)頃の石川氏時代には、町の東側に家中屋敷三と御先手長屋、御持筒長屋、御旗長屋が、西側には家中屋敷五と同心長屋、そして泰順寺という寺が描かれています(「松山城下絵図」⑤=「亀山市図書館」)。

また同じ頃の延享元年の「松山家中屋敷覚」(市図書館)には、柿木丁一四軒の内、五軒家中屋敷、一棟長屋一、番所、木戸番、六軒の一棟長屋、西側に明地があつたと記録されています。

幕末の嘉永二・三年(一八四九・五〇)頃から安政初年(一八五四〜五八)頃には、道の東側一〇軒、西側には正善寺境内を除いて八軒の侍屋敷があつたらしく、一〇石〜一〇〇石取りの家臣が書かれています(「昔

夢一班」)。番所は正善寺の北東の隅、すなわち西の鍛冶町へ通じる鍵型になつた小路の入口にありました(「松山城下屋敷図」=市図書館)。

このように、天保三年(一八三二)と天保一〇年(一八三九)の大火(増補版高梁市史)以前と以後でかなり屋敷の配置や戸数が変わっていることが分かります。

幕末から明治にかけてこの町には寺子屋や私塾があつて、鎌田玄溪や莊田霜溪などが漢学や習字などを教えていて、教育の町にもなっていたのです。そして、明治一二年頃からキリスト教の布教も活発になり、同二二年になつて伊賀谷川に面した柿木町の入口には、木造洋風の高梁基督教会堂(県指定)が出来て多くの医者や学者を排出しています。今では「柿木町」付近は病院や公的施設が多い町になつていて道路の幅も広くなり「城見通り」と名付けられ、武家屋敷の残っていた町筋も昔の面影がなくなつてしまいました。

「柿木町」という地名の由来は、この土地に植生する植物名をそのまま地名にした例で、昭和の初め頃までは武家屋敷の庭には必ず柿の木があつたといわれ、秋になると柿の実が熟れて、柿が目につく町通りだったので。

柿は古くから中国や日本で美果とされていて「味は金液(橘)」「ミカン類の古称(橘)よりも重し」(「字通」)といわれ、当時の武士の家の副食物にもなつて生活の基盤に直接かかわつていて大切にされたのです。このような植物地名は全国各地に見られるのです。

(文・松前俊洋さん)



紺屋川筋から見た柿木町